

説教のポイント

火のなか 水のなかをも

ヨハネ六・一九～二二

イザヤ四三・一～二

ヤコブよ、あなたを創造（バラ）された主は
イスラエルよ、あなたを造られた（ヤツアル）
主は 今、こう言われる…（イザヤ四三・一）

訳語の違いで分かるように聖書には二つの「つくる」があります。創世記一章で神は「光あれ」と言葉で創造（バラ）する。哲学的で論理的な雰囲気。一方、二章で神は人を土の塵で「形作った」（ヤツアル）。こちらはとてもリアル。神自ら手を伸ばし、しゃがんで土をとり、粘土のようにこねて人の形に整えていく。日本語の「手塩にかける」と似た感覚。二つの「つくる」を並べることでイザヤは、人間の創造が深いお考えに基づくと同時に、いかに心をこめ「手塩にかけた」ものであったか示しています。その愛の深さは神が

「あなたはわたしのもの！」（四三・一）と叫ばれるほど。だが、その前に「こうも言われている。『恐れるな！』（四三・二）

あまりに大きな愛を前に私たちは素直になれず、背を向けてしまうことがある。なぜか。恐れが忍び込むから。周囲や社会の強い反対が恐れの原因となることもあるでしょう。でもそれ以上に強いのは自分の中のささやきかもしれない。「もう十分やったよ…」。そうしていつしか愛に慣れつこになり、おざなりになる。でも、実は深い愛を直視し、真剣に向き合うのが恐いのです。嵐の湖を歩くイエスが弟子たちに言われたのも「恐れるな」。素直に愛を受けとめてほしい。ようやく気づいた弟子たちがイエスを迎え入れると、船は滑るように岸へ。どんな大きな恐れでもやはり愛がすべて解決する。神がひとり子を通して示された深い愛を今、迎え入れよう。